のこす1

極北のトナカイ遊牧民のことばを追って

呉人徳司
くれびと とくす / AA研

**私が故郷の内モンゴルを離れ、
日本にきてから25年になろうとしている。
一方で、私が研究対象として関わっているのは
チュクチ人という極北の先住民である。
言ってみればモンゴル、日本、チュクチという
三角関係に立たされているわけだ。**

チュクチ語を勉強するようになったきっかけ

私は1990年の10月に故郷の中国内モンゴル自治区を離れて来日し、最初は北海道大学で研究生として勉強することになった。北海道とはいえ、当時人口170万人ほどの札幌市における生活であり、草原に生まれ育った私にとってそこは文字通りの大都会だった。

来日して2ヶ月がたち、自宅から大学へ行く道もしっかり覚え、街の様子に少し慣れてきた頃、体に変化が起きた。最初は耳鳴りがひどくなり、何とか治まったと思ったら、今度は目が赤くなり、何度も病院に足を運んだ。だが、医者が処方してくれる薬はあまり効果がなく、原因不明のまま体の不調はしばらく続いた。そして私は、「もしかしたら、大都会という生活環境と忙しい生活が、私みたいな田舎者には合っていないのかも」と考えるようになった。

私が在籍していた北海道大学の言語学講座では当初からアイヌ語、ツングース諸語の研究が盛んに行なわれ、その後はさらに発展してエスキモー語、北米北西海岸の先住民言語の研究も行なわれるようになった。先生をはじめ、大学院生の多くがアラスカやカナダ西部、ロシアのシベリア地域で現地調査を行ない、言語の記述研究を進めていた。このような研究方法は、モンゴル語学の教授陣の講義をただ受け身に聞き、かつ文献資料を中心に勉強してきた私にとって大きなカルチャーショックだった。私はこの環境で何か新しいことに挑戦したくなった。しばらく考えた末、「どうせやるなら、モンゴルの世界からかけ離れた地域に行って、未知の民族のことばを勉強してみよう」という素朴な思いを抱くようになり、最終的には、ロシアのチュクト半島およびその周辺地域に暮らすチュクチ人が話すことばを研究してみようと決心した。そして、大学院修士課程に進学し、その3ヶ月後、「遠くて遠い」辺境の地シベリアへ1人で渡り、白夜が続く極北の土地を生まれて初めて踏んだのである。

チュクチ語とチュクチの伝統文化

チュクチ人の総人口は約1万5000人であり、彼らの多くがチュクチ自治管区に居住している。73万平方キロメートルという広い面積を持つこの自治管区は、ベーリング海峡を挟んでアラスカと向い合う。チュクチ自治管区といっても、ロシア人などが大多数を占め、チュクチ人は少数派である。

チュクチ人が話すチュクチ語はチュクチ・カムチャツカ語族に属している。チュクチ語の特徴を1つ挙げれば、動詞が名詞や副詞など様々な要素を抱合しながら拡張していき、その結果長い「一語」が出来上がり、それが日本語の文に匹敵する内容になるという点がある。例えば日本語では、「私は鍋を水でゆすいだ」、「乾いたレインコートをはやく畳もう」という文を、チュクチ語では長い「一語」で言える。

チュクチの人々は伝統的には、地理的な環境と生活様式によって、おおよそ2つのグループに分かれる。一方は広大なツンドラでトナカイを追って遊牧する「トナカイ遊牧民」である。もう一方は東のチュクチ海やベーリング海沿岸地帯に住み、クジラ、アザラシ、セイウチなどの海獣狩猟や漁労活動を営む「海岸チュクチ」である。「チュクチ」という民族の名称は、前者の自称である「チャウチウ」に由来し、その原義は「トナカイ遊牧民」である。しかし、近年になって海岸チュクチが住む海岸地域には本来のトナカイ遊牧民も混じって住むようになっている。私は今までトナカイ遊牧民が暮らす西部地域に行き、彼らのことばを研究してきた。

ツンドラという自然環境を背景としたトナカイ遊牧民チュクチの文化は、海岸チュクチのそれと大きく異なっている。当然の

ツンドラに暮らすチュクチ人の主食はトナカイの肉である。冬の始まりに各家族がトナカイを数頭殺し、冬の食糧に備える。1997年10月撮影。

夏の放牧地の風景。ヤランガという住居の外で、トナカイの毛皮で服作りに励むチュクチ人の女性。1994年8月撮影。

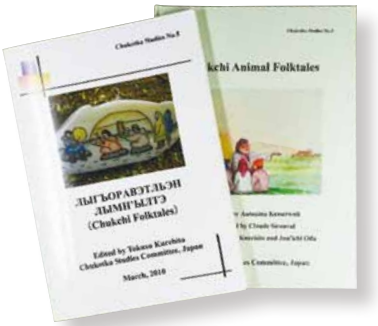
10年近くインフォーマントとして協力していただいているチュクチ人の女性と筆者。聞き取り調査にいつも辛抱強く付き合ってくれる。2012年8月撮影。

祭り用の服を着て、自分の踊りの順番をわくわくしながら待っているチュクチの少女。2002年8月撮影。

イヌを連れ、トナカイの放牧に出かける息子を見送るチュクチ人の女性。1994年8月撮影。

トナカイの毛皮を広げ、その上で凍ったトナカイ肉を斧で叩き潰し、料理の準備をする女性。1997年10月撮影。

チュクチ人の作家ユーリー・ルィトヘウ氏の代表作『クジラの消えた日』の日本語訳。



筆者が収集、または整理・英訳して出版した『チュクチの民話』および『チュクチの動物譚』。

ことながら彼らの生活はトナカイという家畜と密接に結びついている。すなわち、トナカイを橇（そり）による移動に使い、その肉を主な食料にし、その毛皮を衣類だけでなく、テントの覆い、橇の紐、投げ縄として用いるなど、生活の隅々にまでトナカイという動物資源を余すところなく、徹底的に利用して生きている。

チュクチ語が置かれている状況

民族固有の言語の存続は、その言語が親から次の世代へと確かに受け継がれるか否かにかかっている。ロシアのシベリア地域における先住民言語は、親元から子どもたちを隔離する寄宿学校制、ロシア語教育と同化政策の強化により、衰退の一途を辿っているが、チュクチ語の運命も例外ではない。1950年代後半からは、出稼ぎを目的にロシア人をはじめとしたいわゆる白色系人種がチュクチ自治管区に大量移住してきたことに伴い、保育所、学校、診療所などを備えた村が作られた。そして比較的近代的な村の新しい生活スタイルが伝統的な生活を凌駕し始めた。ツンドラの親元にいた子どもたちが、やがて小学校に通う年になると村の学校の宿舎に住み込み、1年のうち8ヶ月以上を村で過ごすことになる。ロシア人が多数を占める村で、10年以上にわたって徹底したロシア語による集団生活と教育を受けることが、若年層のロシア語への同化に拍車をかけたのである。

私がチュクチ語の現地調査を行なってきたチャウン地区のリトクーチ村とヤヌラナイ村では、それぞれチュクチ語に堪能な30代の教師が各年に1日1コマのチュクチ語の授業を行なっているだけである。彼らの懸命な努力にもかかわらず、子どもたちはチュクチ語にはあまり関心がなく、授業が終われば再びロシア語の世界に戻ってしまう。その結果若年層では、チュクチ語を流暢に話せる人はほとんどなく、大半がロシア語に同化している。

チュクチ語を後世に残す試みとして

これまでに、チュクチ人の作家や知識人は、文学作品（小説、詩集など）や民話集の出版などを通じて、民族固有の言語を後世に残す努力を続けてきた。一例を挙げると、チュクチ人の作家ユーリー・ルィトヘウ氏が1960年代からチュクチ語で多くの小説を執筆しており、代表作である『クジラの消えた日』は日本語にも翻訳されている。また1950年代の後半から、自治管区政府の資金援助により、「我が大地」と題するチュクチ語の新聞が週に1回発行されていたが、経済の落ち込みの煽りを受け、1998年に休刊に追い込まれた。

チュクチ自治管区では、学校の教科書を除くと、子どもたちがチュクチ語で読める本は大変不足している。この事情を考慮し、私自身が現地に研究成果を還元する目的で、10年前からチュクチ人のお年寄りから採集してきた多くの民話を編集し、『チュクチの民話』、『チュクチの動物譚（たん）』という2冊の本として出版した。これらは現地の学校の読物として使われている。また、チュクチ人の女性と協力し、フランス人小説家の有名な作品である『星の王子さま』のチュクチ語版を昨年出版した。今年はこの女性と協力し、過去に出版されたが、今は入手が困難になっているチュクチの民話集を再整理・編集し、一冊の本としてまとめ、出版する準備を進めている。

言語は民族独自の文化の最も象徴的な部分であり、それを失うことは民族のアイデンティティを失うことにも繋がる。私は言語という知的財産を自ら守っていくことの大切さをチュクチ語の研究を通じて深く感受したのである。